

東日本大震災
あの日を未来につなぐ、宮城のいま。

NOW IS.

2021.2.11

Vol.
57
February, 2021

ナウイズ
毎月11日発行



水野美紀 in 石巻



震災直後に来た時から

こんなに変わっているなんて！



衣装協力:suzuki takayuki

NOW IS. 対談

対談

Talk Session

in 石巻 ISHINOMAKI

開館から20年。 萬画館とともに見守る 石巻のまちづくり。

つながりが生んだ
多様なまちづくり。

木村仁(以下木村) | 萬画館が
オープンしたのが2001年。

震災は、ちょうど開館10周年を迎えようという時に起きました。**水野美紀(以下水野)** | あの時は萬画館にいたんですか？
木村 | あの地震があった時は石巻魚市場近くで打ち合わせをしていたのですが、揺れが収まったあと、萬画館に戻って来てしまったんです。本当は、すぐに高台に逃げないといけなかったのに。萬画館に着いてお客さまと従業員の避難が完了していることを確認してホッとした時、川の水が引いていることに気がついたんです。津波が来ると思

Mizuno Miki

水野美紀

PROFILE

1974年生まれ、三重県出身。『踊る大捜査線』シリーズなどのドラマ、映画で幅広く活躍。エッセイの執筆も行う。東日本大震災発生後数日で被災地に入り、一般の人々とともにがれき撤去などのボランティアに従事した。

って、急いで避難しました。

水野 | 石巻の方は、水が引いたら津波という知識がある？

木村 | 「地震＝津波。津波が来る時は潮が引く」というのは小さい頃から親に教えられてきました。車で高台に逃げて、坂を登り始めた瞬間、すぐ後ろまで津波が来ていました。

水野 | ソツとしますね…。

木村 | もっと早く逃げるべきでした。萬画館には6mの津波が押し寄せました。流されて来たがれきでガラスが割られ、1階の展示物や、売店の商品は全部

流されてしまいました。原画

などの貴重な資料は無事でした。

水野 | 川がこんなに近いのに？

木村 | 約100年前、この辺りに6mの津波が来たという記録が残っていて、萬画館はそれを参考に設計され、貴重な資料は全て8m以上の高さにある上階に保管していました。教訓が活かされたんですね。

水野 | 私は、震災の一週間後に、ボランティアの第一陣として石巻市に入ったんです。大学のグラウンドにテントを張って、1週間ほどがれき撤去などのお手

伝いをしました。その時、萬画館の建物も見えていたんです。あの中はどうだったのかなと思っ

ていたのですが、そんなことになっ

ていたんですね。

木村 | そんなに早くから。

水野 | はい。裏道にはがれきが

山になっていて。津波が来た場所と少し上った高台とでは天と地ほど状況が違っていて、恐ろ

しさをまざまざと感じました。

木村 | そうでしたね。よくぞこ

こまで戻ったと思います。震災後、水野さんのような方々がたくさん石巻に来てくれて。本当

に助けていただきました。中・

長期的に関わってくれる人も多

いんですよ。移住してきた人も

たくさんいます。

水野 | そうなんですか。

木村 | 石巻は県内第二の都市で

すが、近年活気がなくなっていて、どうにかしようというマンガを

活かしたまちづくりをしていま

した。震災で一気に景色が変わり

ました。しかし全国からたくさん

う組織を立ち上げ、さらなるネッ

トワークづくりやこれからのまち

づくりのガイドラインなどを話し

合い、実践してきました。

水野 | 以前より活性化している

側面もあるんですか？

木村 | はい、震災がなかったら

できなかったであろう取組もあ

ちで発生しました。今はその力

をどう次世代につなぐかという段

Kimura Hitoshi

木村仁

PROFILE

1968年生まれ、女川町出身。株式会社街づくりまぼろ代表取締役専務。会社設立時からマンガを活かしたまちづくりを推進。震災後は「コンパクトシティいのみまき・街なか創生協議会」の一員として復興事業にも関わる。

きむら
ひとし

みずの
みき



震災がなかったらできなかつた

取組もたくさんあるんです。





石ノ森萬画館の展示室は、トンネルのような構造になっていて、石森作品の世界に引き込まれていきます。

Visit
石巻
ISHINOMAKI



大勢のマンガ家から贈られた、応援メッセージの色紙が展示されています。

職業も年齢も違う 様々な人々が 主役になってつくる 新生・石巻。

大行列ができた 震災2か月後のイベント。

石ノ森萬画館を拠点に、様々な催しを企画している木村さんですが、その中で特に印象に残っているイベントがあります。「震災から2か月後の5月のゴールデンウィークに開催したイベントなんです」。そのころはまだ、萬画館を存続できるか分からない状況でした。「でも、スタッフ、自主的に萬画館を片付けに来るんですよ。みんな自宅も被災しているんです。家を片付けるように言っても毎日来るんです。そこで、じゃあ毎年ゴールデンウィークにイベントをしていたので今年もやろう！それが終わったらいったん区切りしよう、って決めたんです」。当時の石巻市は、まだがれきが至るところに残っている状況でした。「子どもたちの遊ぶ場もなかったんで、子どもが楽しめるこ

とをやらうと考えて。5月5日のこどもの日に一日だけやることにしました。当時は反対の声もあつたそう。「不謹慎だと言われたりもしましたが、手伝わせてほしいと言ってくれる方もたくさんいました。当日は6000人も集まって。橋の向こうまで大行列になったんです。「みんな楽しいことを求めているのかもしれないね」と水野さん。木村さんはうなずきます。「最初に必要なのは食べ物や物資でした。それから心の支えになる音楽や芝居、漫画などに」。萬画館はその後2012年11月に再開しました。それから木村さんは復興やまちづくりという視点から様々な催しや取組を行っています。「新しくできた堤防から、川向いの萬画館に映画を映す野外上映会をやったり、川の向こうから萬画館側にボールを蹴る大会をやったりね。地域の口ケーションを活かした楽しみ

方があるんです」と木村さん。水野さんは「おもしろい！」と歓声を上げます。「今の石巻って、子どもが住むのにぴったりの環境かも。刺激もあるし、木村さんのように子どもたちのことを考えてくれる人もいる。家族で改めてゆっくり、萬画館を訪れたいと思いました」。

地域のなりわいに 参加しながら 長期滞在する人々。

次に訪問したのは、住宅街にある一軒の家。ちよっとレトロで懐かしい雰囲気の家から「こんにちは！」と顔を出したのは、巻組の渡邊享子さんです。渡邊さんは、古い空き家をリノベーションしてシェアハウスやゲストハウスなどにしています。



石巻の空き家をリノベーションし、ゲストハウスなどにしている巻組の渡邊享子さん。

トハウスとして活用する取組を行っています。「どんな方が泊まりにくるんですか？」と水野さん。「アーティストやデザイナーなど、いろいろな方が来ます！いま、アドレスホッパーと呼ばれる、住所を定めずにリモートで仕事をする方が増えています。そういう方が滞在して、お仕事をしたりするんですよ。仕事だけでなく、牡蠣剥きのアルバイト

トをしたり、狩猟免許を取ってみたり、マリンスポーツをしたり、石巻の人と海に関わりながら過ごしています。大量消費社会に暮らしている都会の人にとっては、つくる充実感を感じられる水産業の現場ってとてもおもしろいので」と渡邊さん。「夏休みみの間子どもと一緒に来てみたい！そういう豊かな暮らしを感じられるのはいいですよ」と

水野さん。渡邊さんが初めて石巻に来たきっかけは、ボランティア。その後、移住し起業しました。「石巻を選んだ理由は？」と水野さんが聞くと、「人です」と渡邊さん。「地元の人もそうですし、石巻には同じボランティアでここに来ている人がたくさんいたので。この人たちとなら何かできそう、と思ったんですよ」。

人を巻き込んで、様々な動きを生み出す場なんです。巻組もここに集まる人たちがきっかけになって生まれた会社なんです」と松村さん。木村さんが話していた野外上映会も、ISHINOMAKI 2.0に集まる人たちから生まれた企画だそう。「ぼくは石巻出身なのですが、若い頃はここのまちが嫌いだった。閉鎖的でおもしろくなくて。震災があつて、いろんなことが起き、多様な人が石巻に入ってきた。これを機に、石巻をおもしろいまちにしてやろう、って思っています。集まってきた人たちを集積するハブのような場が必要だと思っています。ISHINOMAKI 2.0を始めたんです。だから、ぼくの原動力は、このまちに対する恨み」。松村さんはそう言って笑います。「10年経っても人の出入りは止まらなくて。巻組のゲストハウスに滞在するようになると、新しい動きが起きたりとか。10年経って、ようやく手ごたえが出てきました。復興がひと段落したこれからはもうカーペンチャーとか、地域資源を活用したスタートアップのお手伝いとか、やれることはたくさんあるんですよ」。

できています。生まれ変わって来ると感じます。私、ボランティアに来た時、石巻の人って、人を迎える気持ちが強いです。強いんだなと思ったんです。支援物資を持って行くと、逆にお菓子とかお茶とかくれたりする。「よく来た、これも食べて」と。歓迎したい気持ちがあつた

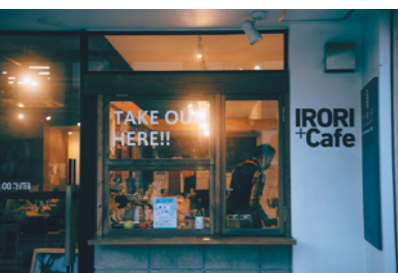
く強くて、あつたかい。震災後にボランティアの人が移住してきたりするというのも、分かる気がします。その石巻の人の力があつたら、助け合って、もっと新しくなることができたらいいなと思います。刺激がいっぱいありました！子どもと一緒に、この空気を感じられたらと思っています」。



ここに注目!
NOW IS. EYE'S



IRORI 石巻 2011年12月にできたオープンシアオフィス兼カフェで、石巻のまちづくりの拠点になっている。ゆかりのアーティストのグッズも販売。



IRORI 石巻に飾られている石巻のまちづくりの現在を描いた地図。あちこちで様々な取組が行われています。

迎え入れる気持ち が強い 石巻の人々。

次に訪れたのは、まちづくりの拠点である「IRORI 石巻」。石巻に住みついた元ボランティアの人たちや、まちづくりのキーマンたちが集う場です。お会いしたのはISHINOMAKI 2.0の松村豪太さん。「ここは、いろんな

とをやらうと考えて。5月5日のこどもの日に一日だけやることにしました。当時は反対の声もあつたそう。「不謹慎だと言われたりもしましたが、手伝わせてほしいと言ってくれる方もたくさんいました。当日は6000人も集まって。橋の向こうまで大行列になったんです。「みんな楽しいことを求めているのかもしれないね」と水野さん。木村さんはうなずきます。「最初に必要なのは食べ物や物資でした。それから心の支えになる音楽や芝居、漫画などに」。萬画館はその後2012年11月に再開しました。それから木村さんは復興やまちづくりという視点から様々な催しや取組を行っています。「新しくできた堤防から、川向いの萬画館に映画を映す野外上映会をやったり、川の向こうから萬画館側にボールを蹴る大会をやったりね。地域の口ケーションを活かした楽しみ



ISHINOMAKI 2.0代表理事の松村豪太さんと。



巻組 代表の渡邊享子さんと。

話し合いを促す避難所初動運営キット



避難所初動運営キット
熊本大学竹内裕希子研究室 企画・開発

避難所開設・運営における混乱は、「災害大国」日本で常に向き合わなければならない課題です。特に、早い段階で避難者・要支援者の数を把握することが、スムーズな二次的支援への移行に欠かせないといえます。

地域防災を研究する熊本大学

check! 01

災害時に混乱はつきもの
避難所の初動対応がその後の明暗を分ける

check! 02

いざという時のことを
地域で話し合う
当事者意識が大切

調査を重ね、防災の知識や避難所運営者の意欲だけでは避難所を円滑に運営できるとは限らず、「場づくり」「人の把握」「ルールづくり」を通じて事前の情報共有を行う大切さも分かってきました。「災害が起きてから急に意思疎通がうまくいくことはありません。

「事前に地域で話し合いをしておく」と課題の少ない運営につながります。そのきっかけにぜひ。

みやぎ復興情報
ポータルサイトは
こちらから!



https://www.fukkomiya.jp

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を開設しています! 復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取組などを発信しています。

NOW IS. 防災

BOSAI FRONT LINE

Vol.21

PROFILE

たけうち ゆきこ
竹内 裕希子さん



熊本大学大学院先端科学研究部准教授。地理学、リスクマネジメントの視点から地域防災・防災教育を研究。関東大震災を経験した祖父の教えから、通学や日常生活でも防災を意識しながら育った。熊本地震の避難所のヒアリング経験から、初動に必要なものを厳選した「避難所初動運営キット」を開発した。

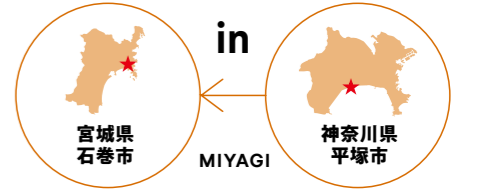
ん。情報共有を通じて信頼が築かれます」。

避難所運営に関わった、あるまちづくり協議会が地元の祭り用に文房具一式をそろえており、避難所の運営に役立つことなどを参考に、初動対応に必要なものをピックアップしています。

「避難所となる学校の先生方は児童・生徒の安全確認や学校再開準備などに注力することが重要です。地域のことは地域の方が一番知っています。避難所を行政や学校任せにせず、地域住民が主体的に運営することが大切です。キットは1つの避難所に1つあればいいので、何が足りないかな?と一度検討してほしいです」。

活躍する応援職員

SUPPORT POWER



石巻市復興政策部 震災伝承推進室
お働き 小貫 奈保 さん
神奈川県平塚市より石巻市に派遣



人々の想いを どう残していくか

「震災遺構は、震災の記憶・教訓を伝承し、防災・減災に役立てていくために残すべきという方、見るのがつらいという方、様々な人の想いがあります。その中で、行政としてどう進めていくのか、とても難しい部分だと感じています」。そう話すのは、2020年4月に、神奈川県平塚市から派遣職員として石巻市に来た小貫さんです。石巻市では、復興政策部震災伝承推進室に所属し、震災遺構の整備や慰霊碑の建立などの業務を担当しています。「現在、石巻市が震災遺構として整備を進めているのは、大川小学校と門脇小学校です。保存が決まる前はもちろん、決まってからも、住民説明会や検討の場を設け、様々な立場の方の意見を伺った上で、どう判断して形にしているのか。全員が100%納得するのは難しいかもしれませんが、想いに応えられるよう頑張りたいです」と、決意を込めた眼差しで小貫さんは話します。「大川小学校は、被災校舎はそのまま残しながら、周辺に展示施設や広場を整備しています。門脇小学校は津波火災の痕跡を残す唯一の遺構で、展示物を充実



日和山公園からの景色。「天気の良い日には足を運び、四季折々の景色を楽しんでいます」。

させていく予定です。訪れた方に、命の尊さを伝えたいですし、防災意識を高めてもらいたいです」。両施設は、2021年度に公開される予定です。「石巻市に来て、職員はもちろん住民の方々も、震災の記憶を忘れないという気持ちや防災意識が高いと感じます。一人ひとりで、そういった意識を持つことが防災・減災につながっていくと感じ、とても勉強になりました」と小貫さん。「復興の一助となれているのか不安に思う時もありますが、任期終了まで、自分の業務に責任を持ってしっかりと取り組んでいきたいです」と話してくれました。

INFORMATION from MIYAGI

〔宮城県からのお知らせ〕

01 東日本大震災10年 オンライン行事のお知らせ

県では、東日本大震災の発生から10年の節目となる3月に、オンライン型行事を開催することとなり、特設サイトを開設しました。是非サイトをご覧ください。皆様が東日本大震災を振り返り、伝えていくきっかけにいただければと思います。



特設サイトはこちら
https://tsutaeau.pref.miyagi.jp

県震災復興推進課
☎022-211-2443

02 NPO等の絆力を活かした 震災復興支援事業成果報告会&交流会

令和2年度絆力補助金交付団体、仙台・仙南地域の復興・被災者支援に関連するNPO等を対象に成果報告会と交流会を開催します。

日 時:3月18日(木)
13時~17時
場 所:エル・パーク仙台 6F
ギャラリーホール

県共同参画社会推進課
☎022-211-2576



Thank you from MIYAGI

宮城から、ありがとう。

全国各地、世界各国から寄せられた、たくさんの支援。
宮城の復興は、そんな数多の想いで成し遂げられています。

SUPPORT FILE
No.9

From セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン / To 石巻市
サントリーホールディングス

石巻市子どもセンター らいつ

「石巻市子どもセンター らいつ（以下「らいつ」）は、利用者である子どもたちの想いが具現化された児童館です。設立の背景には、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下SCJ）とサントリーホールディングス（以下サントリー）の支援がありました。

SCJは、2011年7月に「まのちのために何かしたい」と願う小・中・高校生たち呼びかけ、「石巻市子どもまちづくりクラブ」を発足。子どもたちは「夢のまちプラン」を描き、「石巻の活性化のために中高生が中心となってつくり、運営していく施設」「みんなが過ごしやすく、子どもの想いを世間の人たちに伝えられる場所」をコンセプトとした児童館の設立を企画し、石巻市に提案。子どもたちは行政や地域住民と意見交換を重ね、施設のデザインにも携わりました。建設費用は、サントリーが支援し、2013年12月にらいつが完成。石巻市に寄贈され、翌年1月にオープンしました。

らいつでは、子どもたちが施設運営に参加し、施設のルールを決めたり、イベントを開催したり、まちあるきマップを作成するなど、子どもが主体となって様々な活動に取り組んでいます。やりた

いことを提案でき、実現できる「子ども企画」も。「ただ「やりたい」という気持ちだけではなく、その企画を行うことで、人々にどのような影響を与えられるかをプレゼンし、子どもたちの承認が必要です」と話すのは、職員の大島さんです。子どもたちは、他者との関わりや話し合いなど、様々な体験を通して、自分の想いを伝える力、やりたいことを実現する力を育んでいます。

「子どもの主体性を大切にしながら、これからも子どもたちの社会参画を実現する児童館として邁進していきたいです」と館長の荒木さんは話してくれました。



1 らいつは、石巻市内で唯一の児童館です。2 内部は上下階でそれぞれコミュニケーションが取りやすいよう、吹き抜けに。3 「子ども企画」は、企画書も子どもが作成します。4 職員の大島知子さん(左)は、元SCJ職員。らいつ設立と同時に、らいつの職員に、館長の荒木裕実さん(右)は震災直後に、マタニティー未就学児の子育て支援事業を行う任意団体を立ち上げ、妊婦・未就学児の居場所づくりにも取り組んでいます。

NOW IS. Vol. 57

発行：2021年2月11日 宮城県震災復興本部（事務局：震災復興推進課）
〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号
Tel:022-211-2408 Fax:022-211-2493

『復興情報発信プロジェクト NOW IS.』は、宮城の復興の「いま」を伝えるプロジェクトです。

宮城県
Miyagi Prefectural Government